

二つの香散見草

香散見草に寄せて

教養部助教授 奈古 忠國

古来、梅は人口に膾炙され、愛され親しまれてきた。早春、楚々として咲く可憐な花卉や腹部と薫る香りにやわらかい温もりを感じてのことであろうか。

梅は中国原産であり、当地では花中の王と称されるのも謂れあつてのことであろう。花卉、香り、樹姿、葉などからそれぞれやさしさや年輪や成長を感得することはさして難くない。

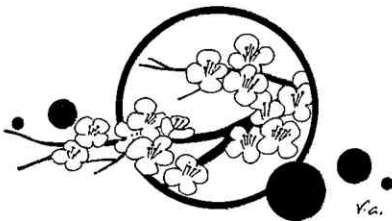
万葉集以前に中国から渡来したと言われるこの梅は、四性に類別され、さらに数多くの風雅な名称を産んだ。道知辺、紅筆、内裏、難波紅、浮牡丹、白砂、紅千鳥、雪灯籠、滄溟の月、武蔵野、摩耶紅、紋隠し等、品種は三百を超える。

花の実を重視した中国産のこの梅が、日本に上陸するや、花卉賞賛へと変容してゆく。加えて、香りの世界へと憧憬の念は拡がってゆく。それは、如何なる風土にも適応し得るおおらかさとも受け取れる。欧米にこの梅が渡ったとしても、この花木は容易に受け入れられるであろう。

それは迎合するのではなく、そしてその存在は決して華麗ではないが、周りに自然と調和し、潤いを与えるであろう。学問や、書籍は、かくありたいと願わずにはいられない。梅のもつ品格、やさしさ、やわらかさ、奥ゆかしさに準えるべく図書館報「香散見草」命名の所以としたい。

因みに、梅の異名には香散見草の他に、句草、君子香、香雪、暗香、好文木、木花などもある。

吉田絃二郎は「東洋芸術の特長はたしかに梅のかすかなつつましやかな香りの如く、そのあがるが如く、無きが如く、静かにして幽かに、くみつくせぬ味の深さにある」という。



梅語り

理工学部建築学科講師 楠田 一夫

香散見草を辞典で引いてみると梅の異称とあった。初め聞きなれない名前なので文字から色々想像してみたがなかなかイメージが浮んでこない。しかしとてもロマンチックな名前である。こんな名前をどの様な人物が名づけたのだろうか、そちらの方が興味がわいてくる。私の知人で陶芸家の武田光夫氏はある雑誌に梅について次のような文章を書いておられた。「……寒気の中で、そこだけが春を思い出させてくれる、梅の小枝に咲く花が、何によりも好きだという妻は、異国に住む私のもとに、小さな白梅の花を押し花にして、手紙に入れて送ってくれた。ほのかに残る芳香に故里の早春を思いえがいた遠い日もあった。……」。氏はながくアメリカで創作活動しておられたので奥様からのお便りにうつり変わる日本の季節をなつかしく感じておられたのであろう。お二人のほのぼのとした暖かさが梅の花をとおして伝わって来るようである。

さて表紙のデザインを依頼されてから私も梅について色々調べた。名前については別に解説があると思うのでひかえさせていただくが、興味深い話があるので少し書いてみたい。明治のはじめ我国も外国にならって国花を定める事になった。色々な意見が出されたが最後まで残って争ったのが梅と桜であった。大議論の末桜が梅に勝ち、国花は桜と定められた。しかし梅も桜も古くから日本人に親しまれ愛されてきた花である。万葉集でも梅をよんだ歌は桜にくらべると3倍近くあるという。おそらく桜は当時の社会的状況から見て忠君、愛国そして軍国主義を進める手段の1つとして採用されたのではないかと想像する。桜はたしかに華やかであるが梅は花言葉の通り忍耐強く、清楚で品位がある。現在梅を国花にしているのは原産地といわれている中国である。我国には一説によると朝鮮の百濟から王仁氏が持って来たとされている。当時は梅の実を薬用として用い大変貴重なものとされていた。2年ほど前、庭に植えた小さな梅の木に今年は5つ実をつけた。我家は5人家族、1人1つづつ、青く丸くふくらんだ梅の実を明日食べようか、今日食べようかと思いつつ眺める毎日である。